小林勇文集

第四卷

筑摩書房

小林勇文集　第四巻

一九八三年一月二十日　第一刷発行

著者　小林　勇

発行者　布川角左衛門

発行所　筑摩書房

101東京都千代田区神田小川町二ノ八

電話　〇三(二九一)七六五一営業部

〇三(二九四)六七一一編集部

振替　東京六-四一二三

印刷所　精興社　製本所　鈴木製本

乱丁・落丁本の場合は御面倒ですが小社読者係宛に御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

Printed in Japan 1983　0395-72504-4604

目　次

人はさびしき　1
編集者の回想録　249
＊
岩波茂雄の芸術　319
亡友と老友　323
妥協しない人　326
晩年の時間　328
山中初秋　332
追憶・終焉記　335

詳細目次

人はさびしき　3
長谷川如是閑　15
安倍能成　28
曾志崎誠二　43
文豪の夫人たち　69
斎藤茂吉　90
内山完造　105
久留勝　125
野呂栄太郎　140
岡田武松　158
二人のエスペランチスト　176
三木清　198
志賀直哉の日記　207
池島信平抄

編集者の回想録

泉鏡花　251
芥川龍之介　253
島崎藤村　255
石原純　257
野呂栄太郎　259
木下杢太郎　261
三木清　263
島木赤彦　265
柳瀬正夢　267
寺田寅彦　270
菊池寛　272
宮本百合子　274
波多野精一　276
尾崎秀実　278
倉田百三　280

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

井上準之助 282
田中松太郎 284
野上豊一郎 287
児島喜久雄 289
西田幾多郎 291
藤原咲平 293
狩野亨吉 295
長谷川千秋 297
大河内正敏 299
中井正一 301
松本慎一 304
山本実彦 306
岩波茂雄 308
漆山又四郎 310
岸田劉生 312
豊島與志雄 314

岩波茂雄の芸術 319
亡友と老友 323
妥協しない人 326
晩年の時間——大拙先生追懐—— 328
山中初秋 332
追憶・終焉記 335
漁村福浦 341
西尾先生と岩波茂雄のこと 344
野上先生と黒須先生 347
人物をかくむずかしさ 353

人はさびしき

長谷川如是閑

長谷川如是閑にはじめて会ったのは多分昭和二年のことだと思う。思うというのは、記録もなく、記憶もはっきりしていないからだ。その年岩波書店で「世界思潮」という講座を計画し、如是閑は執筆者の一人になっており、私は同じ年、編集の仕事をするようになっていたからだ。

如是閑の引受けたのは「現代社会思潮」であった。私は昭和三年八月、岩波書店をやめて鐵塔書院という小さな出版屋をはじめるまで何回も原稿催促に通ったが、とうとう渡して貰えなかった。

昭和二年といえば、如是閑は数え年で五十三歳である。雑誌「我等」を発行してさかんに論陣を張っていた。

周りには若い人たちが集まっており、その人達は如是閑のことを翁（おきな）と呼んでいた。五十歳で翁はおかしいが、そう思って見ればこの人には老成した感じがあった。私は面と向っては先生と呼んだが、かげではその呼び方をすることがあった。翁と呼んでいる人たちが如是閑に最も親しんでいる後輩であるように見えた。

翁がその頃住んでいた東中野はまだ閑静な住宅地であった。駅から線路の左側に沿った細い道を中野の方へ向ってゆくと左へ曲り、こんどは稍ゝ新宿の方へ戻るようになる。生垣の多い道であった。

幾度か曲って、突きあたりに翁の家の小さな古い門があった。門から二十歩ぐらいの露路があって玄関になっていた。翁の家に到る途中に近松秋江の家があった。

講座「世界思潮」の翁の原稿催促には私の仲間の山崎桂三君がせっせと足を運んでいたがなかなか完成しないようであった。或る時翁は、私に「『世界思潮』の原稿も出来なくてね、山崎君に迷惑かけている。しかしもうじき出来上るところまで来た。そこへこの間岩波君が催促にやって来たので、原稿はもうすぐ渡せるところまでいっている。しかし君が来たから出来たといったんでは、さんざん足を運ばせた山崎君にすまない。出来上ったら山崎君に渡す。君の来てくれたことは原稿の進行に少しも関係ないと思ってくれ給え、といってやった」と話した。

翁の原稿作成はいつでも徹底的に難航することをこの頃すでに知った。新聞記者時代もそうであったか私は知らない。多分締切のぎりぎりまでは出来なかったのであろう。翁はその癖を自分で恥らっていた。

或る雑誌の編集者が、今日はどうしても先生の原稿をいただきたいので印刷所で先生の字を読める唯一の老職工を待機させてあるといったという。翁はそれをきくと発奮して忽ち書き上げてしまった。翁の原稿は法にかなった正しい草書であるが、余りに達筆で読むのが困難だった。老職工が家へも帰らず待っているといったことは翁の泣きどころをついたことになったのだろう。

昭和五年の六月、私の鐵塔書院では翁の「歴史を捻ぢる」という本を出版させて貰った。これは毎月「我等」の巻頭に掲載された一頁の短文を集めたものであった。すでに出来ていたものを集めたの

だから、原稿催促の記憶は残っていない。この本は画家の柳瀬正夢が装幀し二十枚の挿絵を描いた。

柳瀬は十七、八歳の頃すでに画家として頭角を表した人で、早くから翁の所へ出入して「我等」に気のきいたカットを書いていた。

柳瀬について翁が書いた文章がある。その一節に、「……やがて私の家の近くに下宿して、……しばしば私の家に出入して、家人同様にしていました。そのうちにあの大正のデモクラシーの嵐の余波をうけて思想の方に関心を持つようになりましたが、もともと芸術的天分とその道の訓練以外に大した素養があったのではないので、画家にして思想に興味を持つ者の多くと同じく、思想の内容からでもなく、また生活の根底からでもなく、ただ時代の空気を気分的に感受して、イデオロギーの実体よりは、その表現形式の魅力を、それが一つの芸術ででもあるかの如く感じて法悦を覚えるのでした。(中略)柳瀬自身は、自分のそのような動きは、私の感化だと考えていたらしく、そんなこともいいましたが、私は彼のみならず、若い人たちにいささかの教えも垂れた覚えはない。彼らの議論に対して反撃もするが、教訓はしない」とある。翁の若い者に対する態度を語ったものとして興味深い。

その柳瀬が或る会社の宣伝雑誌の編集を引受けようとした時、翁は「貴族や金持ちを画家がパトロンに持つことは、双方の心得方如何で、強ち悪いことでもないが、苟くも芸術家ともある者が、商人の仕事に片棒かつぐとは何事だ」といって怒り、どなりつけたので、柳瀬は泣いたということだ。

その柳瀬の挿絵がなかなか出来なかった。私はたまりかねて、柳瀬の家へ泊り込みで催促した。柳瀬はその頃ひそかに「無産者新聞」に鋭い時事漫画を描いていた。「歴史を捻ぢる」の挿絵も同じような傾向のものであったが、翁は別に文句もいわなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

この本には短章八十篇が入れられていて、それぞれ社会の事象に鋭い批判を浴びせている。たとえば中国に行った時の歌の中に「虐げし賢しこき人は亡びつつ虐げられし四億はほろびず」というのがある。

「我等」の昭和四年一月号には、「世界戦争が終ってまだ十年経つか経たぬに、再び世界は戦争の危険に脅かされている」という書出しの「戦争絶滅受合法案」というのがある。ここで「世界戦争」というのは、もちろん第一次世界戦争のことである。

その法案というのは、「左の各項に該当する者を最下級の兵卒として召集し出来るだけ早くこれを最前線に送り、敵の砲火の下に実戦に従はしむべし」というわけで、国家の元首たると大統領たるとを問わず男子。その親族の十六歳以上の男性。総理大臣、各大臣及び次官。代議士（但し戦争に反対の投票をしたる者を除く）。また宗教関係の上位の者で公然と戦争に反対しなかった者も「有資格者」である。こういう連中は戦争継続中兵卒としておく。さらにこれらの「有資格者」の妻娘姉妹などは看護婦又は使役婦として、前線に近いところで勤務させる。

翁はこれを架空の国の物語りとした。たとえ架空の物語りとはいえ、昭和のはじめ「満洲事変」の頃、翁はこういうものを書いたのだ。大阪朝日での活躍、やめてから「我等」その他によって発表された鋭い論文にふれることは、この文章での私の目的ではないからこれ以上引用しない。昭和九年の晩秋私は岩波書店に帰った。その頃も仕事のこと、或は用もないのにたびたび訪問していた。

昭和十二年には日中戦争が始った。それを機に「岩波新書」が計画された。翁は「日本的性格」というのを一冊まとめてくれることになった。既に発表されているものを集めたのであるが、いざ本に

するとなると、校正に手を入れ出して、いつまでたっても校了にしてくれない。私はとうとうかんしゃくを起して、無断で校了にし、本を作ってしまった。その本を持っていった時、翁は予期通り激怒した。しかし私は勝手に校了にしたのは、いつまでたっても終らないから仕方なしにやったのだ、翁の承諾を得て予告したのに、のびのびになって読者にすまないからだ、と抗弁した。翁は本をバラバラ繰ったりしているうちにだんだん機嫌がなおって、怒りも消えた。この本は昭和十三年十二月発行された。

翁はようやく六十四歳になる時である。

この頃と思う。翁は治安維持法違反の疑いで警察に呼ばれたことがある。その時翁の態度が堂々としていたと取調べ官がいったと、のちに私は知人からきいた。

翁の周囲にいる若い人達が還暦の記念として、別荘のようなものを贈ろうという話が持ちあがった。しかし翁は絶対に受けぬという。話はたびたび持ちだされては中途でくすぶっていた。翁に最も近い人たち、嘉治隆一、松本重治、松方三郎、福岡誠一、庄原達、金子鋭氏などのうち誰がこの話の推進役であったか私は知らないが、余りに翁に近いので、説き伏せることが出来なかったのであろう。そうかといって、無断で運んでしまうことも出来なかったのであろう。そのうちに大内兵衛、新居格、三木清という人々も顔を出し、募金をはじめてしまった。事務を私が命じられた。間もなく翁から速達が来た。人のいやだということを強行するのはけしからん、以後君とは絶交すると書いてある。私は先生たちの手足になったに過ぎないのに、翁はその手足に向って絶交状を寄こした。

私はすぐ東中野の翁の家へ行った。私が来た事を知ると翁はいきなり玄関へ出て来た。いつものように黒い上っぱりを着ていた。真赤な顔をして「君は何故ぼくのいやがることをやるんだ」と大きな声でいった。両足を開いて仁王さまのようだった。私はさっさと靴を脱いで上り、翁の傍をすりぬけて応接室へ行った。まだ真赤な顔をしている翁に私は「何です、孫のような者にそんな大きな声でどなったりして」といった。すると翁は苦笑して、しようのない奴だといった。

こんないきさつはあったが募金は行われた。日中戦争がどんどん拡大される頃であったし、発起人は手紙を出したくらいで、非常に積極的でもなかったように思う。集った額では大した家を建てられず結局鎌倉の十二所という所にある古びた百姓家を買った。これに手を加えて、出来上ったのは昭和十四年、翁はすでに六十五歳になっていた。しかし、翁は、すぐにはここを利用しなかった。

結局翁は東中野に住んでいて、昭和二十年五月二十五日の空襲で焼かれ、全財産を失った。翁の長年に亙って集めた本の数はたいへんなものであった。私は翁の書斎へ入れて貰ったことは、二、三回に過ぎず記憶も薄れてしまったが、その部屋には本が充満していた。

一隅には寝台があり、執筆読書のための机には不思議な工夫があった。椅子は籐の寝椅子で、肱かけのあたりに、書見台の仕掛けがあった。原稿を書く時は机上で、また読書も机でやるだろう。しかし疲れたり、気分を換えるためには、寝椅子がすぐ利用されるようになっていたのである。電灯、ペン皿など、七つ道具が、身のまわりに備えつけられていた。

翁の祖父の代まで代々大工の棟梁だったというから翁にもその血が流れていたのであろう。手細工が好きでいろいろ手のかかるものを作っていた。たとえば、薬罐の湯がさめないように、張りぼての

カバーを作る。火鉢へかける、煙突つきの丸形の蓋を紙を張って作る。相当時間のかかる仕事だ。

原稿がなかなか出来ないのにこんな閑事をやっていると催促に行った時腹を立てたことがある。ところが翁は、読書や執筆に疲れた時には、手仕事をするに限るといった。書斎の隣りが応接室で、たいていはここへ通され、待たされた時には翁は書斎から、やあ失敬失敬といって出て来た。

翁はどういうわけかおりおり何かをして「ちょうだい」といった。そんなとき女性的な感じをうけた。そういえば翁は真赤になって怒っている時にも、ぼかりとなぐりつけられるような感触はなかった。この馬鹿者めと一言でどなられたことは私の記憶にはない。

翁には「犬・猫・人間」という本がある。東中野の家には大きな犬がおって、よく応接室に寝そべっていた。犬を飼う話をいろいろ聞いたが、印象に残っているのは、犬に自分で餌を与えない、女中を呼んで、自分は指図だけしているというのだ。犬に威厳を示さないと、いうことをきかないということだった。

東中野の家の焼けた日、柳瀬正夢は新宿駅の近くで焼夷弾にあたって死んだ。

翁は鎌倉に住むようになった。十二所というのは、鎌倉といっても町の中心からは大分はなれている。バスもあるが、間が長いので浄明寺から滑川の上流のいろいろの呼び名のある川に沿って二十分も歩かなければならなかった。敗戦直後は今のように住宅もなく、のんびりした田園風景があった。

翁の住居は、頼焼阿弥陀で名のある光融寺の門前を左に曲って行って突当りになっていた。樹木が多い屋敷だった。小さな門があって入ってゆくと右側に主家から廊下で連った小さな一棟があり、書

斎になっていた。そこだけがいくらか近代的に見えた。主家はもともと茅葺きの百姓家に一寸手を入れただけであるから、住居としては、快適な筈がない。私も鎌倉住いであるから折々翁を訪ねてそう思った。

家の裏手は小さな山になっていた。裏庭に池があり、鯉が放されていた。そして池に跨(またが)って矢場が作られ、翁が肌ぬぎで弓をひいていることがあった。

戦後の物のない窮屈な頃であったが、解放感があって一種の、のびのびした気分があった。翁はその頃七十歳を越えた頃であるが、割合に若々しかったように思う。

或る時、何かの会合に引出そうと思って訪ねると、風邪をひいたといって寝て居った。もう一週間以上じっとしているということだった。熱は三十六度五分であるという。私はそれは平熱だといったが、翁はわたしの平熱は五度五分だといった。風邪をひいた時は寝ているのが一番いい、決して無理をしないのが健康法で長寿法だと強調した。何事も無理をしないというのが翁の生活信条なのだ。

翁の喜寿は昭和二十六年であった。その前年頃から再び翁に家を呈上しようという話が周囲の者から持ちあがった。十二所の百姓家は如何にも貧しく不便であるというわけだ。

今度は募金もスムーズに行われたが、必ずしも好成績だとはいえない額だった。しかし翁も満足し、土地探しがはじまった。何ごとも無理をしないということは、裏返すと、もの事をてきぱきやらないということ、或はその言訳のように私には思える。翁の周囲の人達も同じ傾向があった。確かなことはわからないが、翁の土地探しは昭和二十六年にはもう始っていたのではないかと思う。

私が翁に土地探しのお供を仰せつかったのは、それより後のことであった。二人とも鎌倉に住んでいるのだから、打合せて一緒に出かけるには好都合だった。東京郊外へいったり、鵠沼、藤沢、国府津、湯河原、熱海と見て歩いたところは多い。翁は新聞などに出ている広告も切抜いてきちんと台紙に貼ったのを持っていた。

出かける時は前もって打合せた。多くの時は日曜日が当てられた。そして前日土曜の夜は大てい私の家へ来て夕飯を一緒にし、泊った。翁は私の幼い子供達を交えた、家庭的な雰囲気が好きなようだった。恐らく翁はその長い生涯に幼い子達と炬燵に入って賑かに食事をするというようなことは何回もなかったのではあるまいか。私の子供達は人おじしない方であったから、翁とよく話をしていた。翁の清純な顔や態度が子供らにも親しかったのであろう。

或る夜、茶の間の炬燵で夕飯を食っていた。私は酒を飲みほとんど飲まない翁はしきりに料理に手を出していた。二人の幼童は翁を珍しげに眺めてい、妻は台所で働いていた。突然翁が眼鏡を卓袱台(ちゃぶだい)の上へガチャンと投げ出して、手で顔を覆って、異様な声で泣き出した。驚いて見たが、それは他人が何か口をさしはさむことが出来る状態ではなかった。私も子供達も呆然とし、台所の妻も包丁を持ったまま顔を出した。

しばらくして翁は顔から手をはなし泣きやんだ。そしてはじらい、赤い顔をして「失敬、失敬」といった。ややたって私は「どうしたんですか」ときいた。私にはその前、何か翁の感情を刺戟するようなことがあったとは思えなかったからだ。

翁は少し照れくさいような顔をしたが「わたしはむかしから職人のことが出ると泣く癖がある」と

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com